

# 平成 27 年 7 月 26 日放送

富山教区 富山組 金乗坊 西塔公崇

今から 20 年ほど前、私が大学生だった頃の話です。

東京で若者のとる行動がちよっとした社会問題になったことがありました。それは、高校生などの若者が、電車の車内の通路など座席ではないところにどっかりとあぐらをかいて座ってしまったり、駅の構内や繁華街の歩道の道端などにどっしりと腰をおろして座り、何時間もしゃべっているというような、ところ構わず地面に座ってしまうという若者の行動が問題となったのです。このような行動はほとんどひろがり、若者が地面に座っているのをそこらぢゅうで見かけるようになりました。地べたにべったりと座ってしまうということから、このような行動をとる若者は「ジベタリアン」と呼ばれ、新聞やテレビにも取り上げられるようになりました。大人達からはみっともないとか、なぜあのような行動をとるのか理解できないといった苦情がよせられ、一種の社会問題となったのです。

そんな当時のある日、私は夜 11 時から始まるテレビのニュース番組を見ていました。すると、この「ジベタリアン」の問題が取り上げられていました。若者達がなぜあのような行動をとるのか理解できないから、地べたに座っている若者に直接意見を聞きにいきましょう。若者には若者の言い分があるはずだ。ということで、日本屈指の繁華街で有名な、東京、渋谷のセンター街で実際に地べたに座っている「ジベタリアン」に番組のスタッフがインタビューをしていました。センター街の道端で制服姿であぐらをかいて座っている女子高生たちに、「あなたはなぜ、地べたに座るのですか？悪いこととは思いませんか？」と質問したところ、女子高生たちは「え～、別に誰にも迷惑かけてないし～、いいと思う！」と笑顔で答えていました。他の若者達も同様の答えでした。どうやら若者達にはあまり悪気はなかったようです。これを見て私は、非常にけしからんことだと思いました。電車内での座り込みは明らかに乗客の妨げになっていますし、繁華街の道端も、仮に歩行者の通行の邪魔にはなっていないとしても、街の風紀を乱し、見る人に嫌悪感をいだかせるとしたならば、迷惑をかけているともいえるのに、若者達はまったく自らの行動が持っている問題性に気がついていない。なんとも今時の若者はけしからん、嘆かわしいことだと思ったのです。

さて、話は変わりますが、約 2500 年前のインドでお釈迦様の説かれた教えとはどのような教えなのでしょう。一言で言えば、人生の苦しみを乗り越えていく方法を教えるのがお釈迦様の説かれた仏教の教えです。仏教でいう「苦しみ」とは、「肉体的な苦痛」ではなく、「思い通りにならない苦しみ」つまり「精神的な苦しみ」を指します。そしてその苦しみを乗り越えていく方法として、四つの真理が説かれます。人生は苦であるという真理（苦諦）・その苦の原因は煩悩であるという真理（集諦）・その煩悩を消滅させれば苦がなくなるという真理（滅諦）・そのためには正しい実践をしなければならないという真理（道諦）。この四つの真理（四諦）です。つまり、人生には思い通りにならない苦しみがあるが、その原因は煩悩である。だから、正しい実践をして煩悩をなくせば、安らかな人生が送れる。というのです。

それではこの苦しみの原因である、「煩悩」とはなんなのでしょう。お釈迦様は「煩悩」とは、「欲望（貪欲）」と「いかり、はらだち（瞋恚）」と「真理を知らない愚かさ（愚痴）」であるとおっしゃいます。この欲といかりと愚かさは、全て自分中心の心から出てくるものです。すなわち、自分にとって都合のいいものは欲しいと思い、自分にとって都合の悪いものは拒絶して腹をたて、「自分の都合」という色眼鏡でしかものを見ていないから、物事の本当のすがたが見えていないのです。したがって「煩悩」の正体は「自分の都合」という「自分中心の心」だといってもいいでしょう。この「自分中心の心」があるから、私たちは自分にとって都合のいい状況を求めます。しかしこの「自分中心の心」があるからこそ、その通りにならないときは苦しまなければならないのだよ、というのがお釈迦さまの教えなのです。

そうはいっても、私たちは人生において、思い通りにならない苦しみに出会ったとき、その原因が自分にあると思えるでしょうか。往々にして、その原因を他人や自分以外の環境のせいにしてしていることが多いのではないのでしょうか？私の卑近な例で申しますと、朝 8:30 までにお参りに行かなければならないお宅があり、急いで車で向っている時に、信号に引っかかってイライラする。渋滞に引っかかって他の車に八つ当たりする。急いでいない時はなんとも思わないことが、急いでいる時には腹が立つ。まさに、自分の思い通りにならないことに対して、「なんでこんなところに信号があるんだよ」とか、「なんでこんなところで工事してるんだよ」とか言って自分以外のもののせいにしてるのが、私の日常のすがたであります。都合の悪いことがおこると、自分自身に原因を見いださず、自分以外のもののせいにして。自らの問題性に全く気がついていないのが、私のありさまであります。

このような私のありさまは、まるで、さきほどお話しした、自らの問題性に全く気がついていない「ジベタリアン」と呼ばれていた若者達となんら変わらないのではないのでしょうか。

ところが、このような私のありさまを見て、けしからんと嘆かわしく思うのではなくて、そのような私だからこそ、放っておけないと思われたのが、阿弥陀仏という仏さまでありました。自らの問題性に気がつけず、周りのせいにして文句ばかり言っている私。仏教の教えなど聞こうともせず、なんの危機感もなく、自分の都合だけを追い求めて生きている私。そのような者を救うにはどうしたらよいのか、と考えられた阿弥陀さまは、「南無阿弥陀仏」というお念仏の響きとなることを選択されました。「南無阿弥陀仏」というお念仏の喚び声となって、私のところに至り届いて、私の口に称えられ、私の耳に響き込んで、私を抱きかかえ、私を支え、生涯を通して私を呼び覚ましつづける。やがて私が生涯を終えていかなければならない時が来たならば、私を阿弥陀さまのさとの世界（浄土）に生まれさせ（往

生)、煩惱を消滅させ、真の安らぎを与えるという方法を選択されました。このようにする以外に、もう私を救う手だてはなかったのです。仏教の教えを聞く気のない者を仏教の教えを聞かすにはいられない者に育て上げ、お念仏を称えるはずのない者をお念仏を称えずにはいられない者に育て上げるために、阿弥陀さまは今もあらゆる方法を駆使して、絶えず私たちにはたらきかけてくださっています。

## 【解説】

西洋には「信じる者は救われる」と「信じる」ことから始まるとされる宗教もあるようですが、仏教ではまず、私は「煩惱」という自分中心の心に振り回されているという自己認識から始まります。すなわち、「私は迷っている」という認識こそが仏教のスタートラインです。

ところが、「私は迷っている」という仏教のスタートラインにも立てないのが私たちです。思い通りにいかないのは、自分が悪いのではなく、自分以外が悪いんだと思ってしまうのです。

山で道に迷っている状態には二種類あります。一つは、自分が間違った道にいると気がつき、立ち止まってどちらにいったらいいか思い悩んでいる状態。もう一つは、山で道に迷っているのに、自分は目的地にまっすぐ向っているはずだと思込み、迷っていることに気がついていない状態。この二つの中、より激しい迷い方は、言うまでもなく後者の迷い方です。都合の悪いことがおこると、自分自身に原因を見いださず、自分以外のもののせいにして私たちがすがたは、自らの迷いにも気がついていない、後者の迷い方の状態でありましょう。このように自らの問題性に全く気がついていないのが、私たちのありさまでありました。

しかし、そのような私たちでも歩める仏道こそが、親鸞聖人が明らかにしてくださったお念仏の道でした。煩惱に支配され、煩惱に引きづりまわされている私のことを心配して、絶えず喚び覚ましつづけて下さる如来の喚び声（お念仏）に喚び覚まされつづけながら、煩惱はなくなるまで、しかし煩惱に引きづりまわされるのではなく、如来の教えに引っぱられる（導かれる）人生を歩ませていただく。これがお念仏の人生であります。

浄土真宗は、「信じる者は救われる」ではありません。「信じようともしないほど迷っているものを救いたい」という阿弥陀仏の願いを聞かせていただく教えなのです。